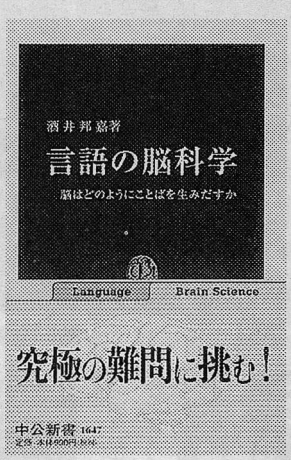

4-12-101647-5

中公新書

言語の脳科学

脳はどのようにことばを生みだすか

言語という究極の難問に挑む

酒井邦嘉

言語がサイエンスの対象であることを明らかにするのが、本書のモチーフである。言語に規則があるのは、人間が規則的に言語を作ったためではなく、言語が自然法則に従っているためだと私は考える。この考えは、一般の常識に反したものであろう。しかし、この問題提起がなければ、言語の脳科学は始まらないし、それが正しいかどうかは、科学的に検討してみなくてはならない問題である。「人間に特有な言語能力は、脳の生得的な性質に由来する」、と半世紀にわたって主張してきたのは、言語学者のノーム・チョムスキーであった。チョムスキーほど二十世紀後半の自然科学・人文科学・社会科学のすべてに影響を与えた人は他にいない。その意味で、まさに「知の巨人」である。しかし、生得説を裏付けるための証拠が未だ不十分なため、チョムスキーの革命的な考えは、多くの誤解と批判にさらされている。言語の脳機能の分析は、実験の積み重ねとMRI技術などの向上によって、飛躍的な進歩を遂げてきた。本書は、この新しいサイエンスの息吹を伝えながら、言語という究極の難問に、脳科学の視点から挑むものである。

言語をはじめとする脳の高次機能の研究は、「システム・サイエンス」と呼ばれる。システムの研究には、洞察力や直感といったセンスが特に必要とされる。その理由は、システムを構成する要素の組み合わせが膨大なために、すべての可能性を網羅的に検証しようとすることが難しいからである。そこで、よくよく洞察力を働かせて仮説を立て、これを検証するしか道はないことになる。こうした仮説検証型の実験の難しいところは、予め見ようとしたものしか見えないことにある。つまり、答がある程度まで予想できないと、正しい答も得られないのだ。実はこれこそがシステム・サイエンス特有の醍醐味なのだが、すぐに結論を得ようとする性急な人や、完全癖の強すぎる人には向かないフィールドでもある。いったん方針を決めたら、大胆な抽象化と理想化を推し進めて法則性の解明に乗り出して行くのが、サイエンス、特に物理学の常道である。

言語の本質がコミュニケーションを通して「意味」を伝えることにあると信じて疑わない人にとって、言語が意味なくして成立するとは想像さえしなかったであろう。実際、動物も何らかのコミュニケーションを行っているから、動物にも人間とよく似た言語があるに違いないと予想して、類人猿が言葉を覚えられるかどうかが検証されてきた。これは、人間の言語がいかにユニークであるかという洞察を欠いたために生じた、仮説そのものの間違いなのである。それに対してチョムスキーは、大胆にまず意味を切り捨てることで、人間の言語の根幹となる「文法」の法則性を明らかにすることに成功した。その意味で、言語のサイエンスは物理学そのものなのである。中でも言語の脳科学は、新しい仮説によってどんなに面白いことがわかっていくのだろう、と期待がふくらむテーマである。言語の脳科学には未知の問題がたくさん眠っており、科学者の挑戦を待っている。（さかい・くにより氏＝東京大学助教授・脳科学専攻）（三四八頁・九〇〇円・中央公論新社）